

歯列と生活習慣の関係は

弘大COIと黒石市など調査 児童対象に全国初

健康長寿へ新たな視点

弘前大学COIと黒石市などは今年度から3年間、同市の小学4〜6年生を対象に、歯列と生活習慣の関係を調査する。同調査は全国初の試みとみられ、世界的にも珍しいという。8日は、第1号校として北陽小学校の児童23人を調査した。口腔内の健康は近年、全身の健康に大きな影響を及ぼすことが明らかになっており、弘大などは調査で得られた知見を基に健康教育を確立し、「口腔保健」という新たな視点で健康長寿社会の実現を目指す。(成田真矢)



歯列と生活習慣の関係を明らかにしようとスタートした調査

弘前大学、黒石市、ライオン、南黒歯科医師会の共同研究。同市は2015年に健康都市宣言を行い、市を挙げて健康づくりに取り組んでいる。

調査は黒石市内の全小学校(9校)の4〜6年生を対象に3年間行う。歯列調査の他、生活習慣や口周りの癖についてのアンケート、立ち姿勢の測定を実施。小学1年からの学校歯科健診のデータも加味して、生活習慣と歯列の関係を究明する。

7月までに各小学校での調査を完了する。北陽小での調査は、学校歯科健診に合わせ行われ、対象者55人のうち同意した23人の児童の歯列の撮影と立ち姿勢の測定を行った。歯列の撮影は口を閉じたもの、舌、歯並びの3種類を撮影。立ち姿勢の測定は、歯並びとの関連が大きいとの提案につなげたい」との先行研究に基づく検証で、首や背骨などの傾き・ずれを測った。

全国で初とされる調査が黒石市で行われることに、高橋憲市長は「このデータを活用し、日本のみならず世界の子どもの健康に貢献できれば」と期待。ライオン口腔健康科学研究所の山本幸夫所長は「生活習慣と合わせた調査を行うことで、より良い生活習慣メタボリックシンドロームに焦点を絞っているが、歯科口腔も加えたい」と話した。弘大と黒石市などは、歯列・生活習慣調査の他、6月の全国小学生歯みがき大会(公益財団法人ライオン歯科衛生研究所主催)への参加、母親唾液検査と歯科保健指導(20年度予定)などにも取り組む。

今年度の対象者は約700人で、このうち同意を得られた児童に対して調査を行う。弘大は5割程度の参加を見込んでいるという。